

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

2023 Vol. 11

【特集】

沖縄の総合診療（在宅医療・緩和ケア）

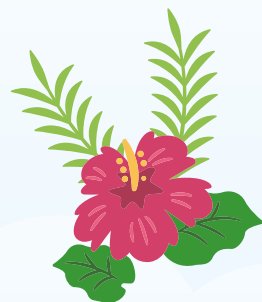
離島医療の最前線、沖縄の地で
人々の幸せな暮らしを追求し
未来の医療を支えるジェネラリストたち



Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン



沖縄で活躍する医師たちを通して

沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン『ムルウチナー』。

『ムル』は全部、『ウチナー』は沖縄を意味します。

今号は、ここ沖縄の地で、人々の幸せな暮らしを支える

総合診療(在宅医療・緩和ケア)に携わる医師の声から、

総合診療医の魅力について迫ります。





2023. Spring vol.11

INDEX

【特 集】

沖縄の総合診療(在宅医療・緩和ケア)



P.02

Top Interview

“かけがえのない医師”として
人々の暮らしと未来の医療を支える

沖縄県医師会 在宅医療・介護連携統括アドバイザー
医療法人・社会福祉法人 以和貴会 西崎病院 総合診療科

新屋 洋平 先生

OKINAWA DOCTORS SCENE

P.04

#1 沖縄県立中部病院

地域診療科
総合診療科専門研修プログラム副責任者

幸喜 翔 先生

総合診療科
専攻医

與那覇 智貴 先生



P.07

#2 沖縄県立宮古病院

前院長 総合診療科・リハビリテーション科
研修センター長

本永 英治 先生

総合診療科

照屋 翔二郎 先生

P.10

#3 ドクターゴン診療所

院長

泰川 恵吾 先生

P.13

#4 沖縄県立八重山病院

総合診療科
総合診療科専門研修プログラム統括責任者

酒井 達也 先生

総合診療科
専攻医

波平 郁実 先生

P.16

Muru Uchina Test

ムルウチナー検定



“かけがえない医師”として 人々の暮らしと未来の医療を支える



地域包括ケアシステムの構築や訪問診療医のネットワークづくりなど、沖縄の地で在宅医療の普及・発展に尽力する新屋洋平先生に聞いた、在宅医療に携わる魅力と総合診療医を目指す意義とは——。

Interviewee

新屋 洋平 先生

Yohei Shinya

Title

沖縄県医師会
在宅医療・介護連携統括アドバイザー
医療法人・社会福祉法人 以和貴会
西崎病院 総合診療科

Profile

沖縄県那覇市出身。2005年自治医科大学卒業。沖縄県立中部病院にて初期臨床研修、後期研修。2008年より離島の一人医師として阿嘉診療所（座間味村）に5年間勤務。2013年に沖縄県立中部病院地域ケア科、緩和ケアチーム。2016年度より「沖縄県医師会在宅医療・介護連携に関する市町村支援事業」在宅医療・介護連携アドバイザー。2018年中部徳洲会病院在宅・緩和ケア科医長。2021年12月より医療法人・社会福祉法人以和貴会西崎病院の総合診療科。日本プライマリ・ケア連合学会認定家庭医療専門医・指導医、日本在宅医療連合学会認定在宅専門医・指導医 評議員





在宅医療で初めて感じた 医師としての高い満足度

高齢化が急速に進展している日本。総務省人口推計によると2025年の高齢化率は30%、2036年には33.3%と3人に1人が高齢者となる。この状況は沖縄県でも同じ。全国と比べて緩やかながらも着実に高齢化が進行し続けていく。

超高齢化社会を迎えた日本の医療にとって最重要となるのが、在宅医療や介護連携を軸とした地域包括ケアシステムの構築による、生活を支える医療だ。

自らも第一線のプレイヤーとして在宅医療、緩和ケアに従事し、沖縄の未来の医療を支えるために在宅医療の普及に尽力している医師がいる。

新屋洋平先生だ。島医者に憧れ自治医科大学に進学し、卒業後は沖縄県立中部病院で研鑽を積み、離島の一人医師として2008年から2013年まで阿嘉診療所(座間味村)に勤務。この離島医療での経験が、新屋先生のこれから進むべき医師人生の羅針盤をはっきりと照らした。

「島で往診に行くと、市町村からの表彰状やご家族の写真、お孫さ

んの手紙などが部屋に飾ってあり、外来ではわからなかった患者さんの人生を知ることができる。お看取りも本人の希望を汲み取った最期を迎えられたとき、ご家族から『ありがとう』と感謝される。老衰で人生を全うして亡くなったときは、親族が大勢集まって宴が始まり故人の思い出話に花が咲く。病院の医療では経験できなかった医師としての大きな満足感があつたんです」

こうして新屋先生は在宅医療の道に進むことを決める。2013年4月、地域ケア科が開設すると同時に中部病院に戻り、緩和ケアチームの専任医師および訪問診療に従事。以来、現在に至るまで在宅医療と緩和ケアの第一線で活躍している。

社会的ニーズが高まっているにも関わらず、在宅医療に携わる医師は少ない。専門志向の高さなどさまざまな理由があるが、その一つの要因として、「在宅医療は24時間365日対応が必要。そこに抵抗を感じる先生も多い」と新屋先生は話す。

こうした課題を解決するための取り組みも行わ

在宅医療に携わることの “楽しさ”を知ってほしい



れている。新屋先生は2016年度から沖縄県医師会在宅医療・介護連携統括アドバイザーを務め、

2022年には『一般社団法人OHS 沖縄往診サポート』を立ち

上げるなど、在宅医療に従事する医師たちのネット

ワークづくりを進めている。「ネットワークを通して

代診を頼むことができた、みんなで支え合うことで24時間365日対応を可能としながら、先生たち

もしつかり休むことができます」

在宅医療は忙しいというイメージが先行しがちだが、新屋先生は一人でも

でも在宅医療を体験し、その楽しさを知ってほしいと語る。

「在宅医療未経験の先生でも、訪問診療の体制が整っている医療機関では多職種の手厚いバックアップが受けられるため対応もしやすいでしょう。訪問診療を週に半日手伝うだけでも患者さんの役に立っていることをダイレクトに実感できるはず。医師としての充実度の高さと楽しさを感じてほしいですね」

新屋先生は日本在宅医療連合学会認定の在宅専門医であり、指導医でもある。現在、新屋先生が在籍している西崎病院総合診療科では訪問診療医を募集しており、ここで経験を積むことで在宅専門医の資格取得も可能だ。

一人でも多くの医師が在宅医療に携わり、患者や家族、そして地域にとってかけがえのない医師になってほしいと新屋先生は願う。「在宅医療や緩和ケアに携わる医師は、その患者さんやご家族にとって代わりとなるものがない、かけがえのない医師なんです。『いつでも自分の代わりがいる』と

患者や家族、地域にとって “かけがえのない医師”になる

いうのは、『自分はいなくてもいい』と言っているのと同じ。はたから見れば在宅医療は『大変な仕事』と思われています。でも、そんなことは全く感じていません。医師としての存在意義を感じることができ、やりがいはいのすこく大きいんですよ」と、新屋先生は満面の笑みを見せた。

患者や家族、そして地域にとってかけがえのない医師になる。在宅医療は、医師としての存在意義を最も感じる事ができる、楽しさとやりがいにあふれた医療である。



Hospital Data

医療法人・社会福祉法人

以和貴会

西崎病院

〒901-0314

沖縄県糸満市座波371-1

TEL:098-992-0055

<https://iwakikai.net/nishizaki/>



OKINAWA

DOCTORS SCENE

沖縄の総合診療
(在宅医療・緩和ケア)

#1 沖縄県立中部病院





目の前で困っているどんな人にも 自信をもって 自分の力を提供できる医師に

沖縄県立中部病院 地域診療科
総合診療科専門研修プログラム副責任者

幸喜 翔 先生 Sho Koki

〔出身地〕 沖縄県那覇市 〔出身大学〕 自治医科大学(2011年卒)

幸喜翔先生は卒後4年目に西表西部診療所(西表島)に3年間、その後は北大東診療所(北大東島)に2年間と、一人医師による離島診療所の経験を持つ。

現在は沖縄県立中部病院の地域診療科の医師として地域包括ケアシステムに携わり、在宅医療などを支えている。

2020年からは地域のコロナ感染症対策として高齢者・障がい者施設などへの訪問も行い、PCR

検査や感染症対策指導も担当した。さらに総合診療科専門研修プログラム副責任者として総合診療医の育成にも尽力し、代診医師として離島診療所の支援もする。

「医者になったんだなと初めて実感することができたのは離島医療を経験してから。それまでたくさん勉強して知識も技術も身につけてきたつもりでしたが、本当に大きく成長でき

離島医療を経験したことが 医師としての大きな成長に

たのは島医者になってからなんだよね」

中部病院の初期臨床研修は全国的にも有名で人気が高い。1次から3次までの多彩な患者が集まり、研修医が最前線で診療に当たること、確かな基礎力を培うことができる。そこからさらに総合診療科専門研修プログラムに進めば、離島診療所に一人医師として従事するための幅広い知識と技術、そしてマネジメント力も獲得できる。幸喜先生は自信をもってこう語る。

「総合診療は全患者さんが対象。離島医療を経験することで、どんな患者さんであっても自分の力を提供できる医師になれる。これは本当に素晴らしいこと。離島医療を通して、これまで以上に大きく成長した自分に出会えるはずですよ」

高齢化社会においては、病院に限らず自宅でも医療を受けられることがますます重要となる。在宅医療のニーズは非常に高く、それを担う総合診療医は未来の医

離島医療や在宅医療で 本当の楽しさを知る

療を支えるために必要不可欠な存在だ。

「訪問診療では患者さんの暮らしのなかに入ることができる。家での役割、生き甲斐、今何に困っている何が必要なのか。そういったことが目に見えてくることで、患者さんやご家族が抱えるさまざまな問題の最適な解決方法や治療アプローチがわかる。外来では経験できない、医師としての大きな醍醐味があります」

患者の顔が見え、生活が見える離島医療の経験は、こうした医師としてのやりがいや醍醐味を味わうことができ、さらに医師としても人間としても大きく成長させてくれる。幸喜先生は島によっても医療の違いがあり、複数の離島診療所を経験してほしいと語る。

「島ごとに医療が違います。生活や文化、行政との関わり方にも違いがある。そうしたところも面白いんですよね。複数の離島診療所を経験することで、その後、目の前で困っている患者さんにどのような医療、介護、連携、行政サポートが必要なのか分かり、さらにステップアップした医療を提供できるようになるんです」



西表西部診療所(西表島)時代。
島のお祭や行事に参加したとき



Profile

自治医科大学卒業後、沖縄県立中部病院にて初期臨床研修、後期研修。4年目から離島の一人医師として西表西部診療所(西表島)に3年間従事。その後、沖縄県立八重山病院や北大東診療所(北大東島)勤務を経て、2020年から沖縄県立中部病院地域診療科。日本プライマリ・ケア連合学会認定家庭医療専門医・指導医。

「人生の最期は住み慣れた家で」 その想いを叶えるために

沖縄県立中部病院 総合診療科 専攻医

與那覇 智貴 先生 Tomoki Yonaha

〔出身地〕沖縄県那覇市 〔出身大学〕琉球大学医学部地域枠(2020年卒)

Profile 琉球大学医学部(地域枠)を卒業後、沖縄県立中部病院で初期臨床研修。同病院にて総合診療科の専攻医。



「人生の最期は住み慣れた家で穏やかに過ごすことが多くの人々の願い。しかし、在宅医療に従事する医師は少なく、その想いが叶わない患者さんが多くいます。なんとかしたい。だったら僕がその道に進めばいいと思ったんです」

與那覇智貴先生は沖縄の地域医療に貢献したいと琉球大学医学部に地域枠で入学。沖縄県立中部病院で初期臨床研修を行い、現在は総合診療科の専攻医として研鑽を積んでいる。「中部病院では、多彩な症例を研修医が主体

「自分がなんとかしたい」と 総合診療医の道に進む

となって診ることができ、病状の説明なども研修医主体で行うことができる。さらに指導医数も多いため、一人ひとりの患者さんに対するマネジメントや対応の仕方などもきめ細かく指導していただけます」

伝統である屋根瓦式教育システムによって2年目には1年目の先輩を指導する立場にもなり、教えることでさらなる学びを得ることが

ができる。引き続き総合診療科専門研修プログラムに進むことで、内科、小児科、救急などを深く学び、さらに在宅医療や緩和ケアも経験。医師一人の離島診療所をマネジメントできる実力を獲得できることが特徴だ。

総合診療医の魅力について、與那覇先生はこう語った。

「幅広い知識によって医学的にいろんなアプローチができるだけではなく、患者さんを取り巻く環境も含め人間全体をみることでできる。外来ではお孫さんやペットの話など、世間話をしながら生活背景もみたり、一日一回は必ず入院患者さんにお会

臓器別専門医からも頼りにされ 医療問題も解決できる医師

いして世間話をしながら診察をしたり。そうして築いた信頼関係によって、一人ひとりに最適な医療を提供できること。信頼関係から生まれる医療を実践できたときの喜びはとても大きいですね」

総合診療医は患者や家族にとつて何でも相談でき頼りにされる医師だ。それだけではなく、幅広い知識を有しているため、専攻医で

あつても臓器別専門医から相談を受けることも多い。多くの医師たちからも頼りにされる存在だ。

「さらに幅広い疾患を診ることができる総合診療医がいることで、疾患別に複数の医療機関にかかり多くの薬を服用するポリファーマシー(多剤併用による薬物有害事象)も防ぐことができます。総合診療医によって患者さんの負担軽減はもちろん、引いては医療経済的にも大きなメリットをもたらすこともできます」と、與那覇先生は語る。

中部病院の総合診療科では、専攻医3年目に島で一人医師として離島医療に従事する。卒業5年という若さで一人医師として島の医療を支えることに不安はないのだ

ろうか。與那覇先生は笑顔でこう答えた。

「そのための経験を積んでいますし、楽しみの方が大きいですね。これからの長い医師人生において大きなプラスになると期待しています。離島医療を経験し、総合診療や在宅医療の場で活躍できる医師となり、多くの人々の想いである「人生の最期を住み慣れた家で」を実現させたいです」と、與那覇先生はこれからの医師人生に大きな期待を膨らませた。



Hospital
Data

沖縄県立中部病院

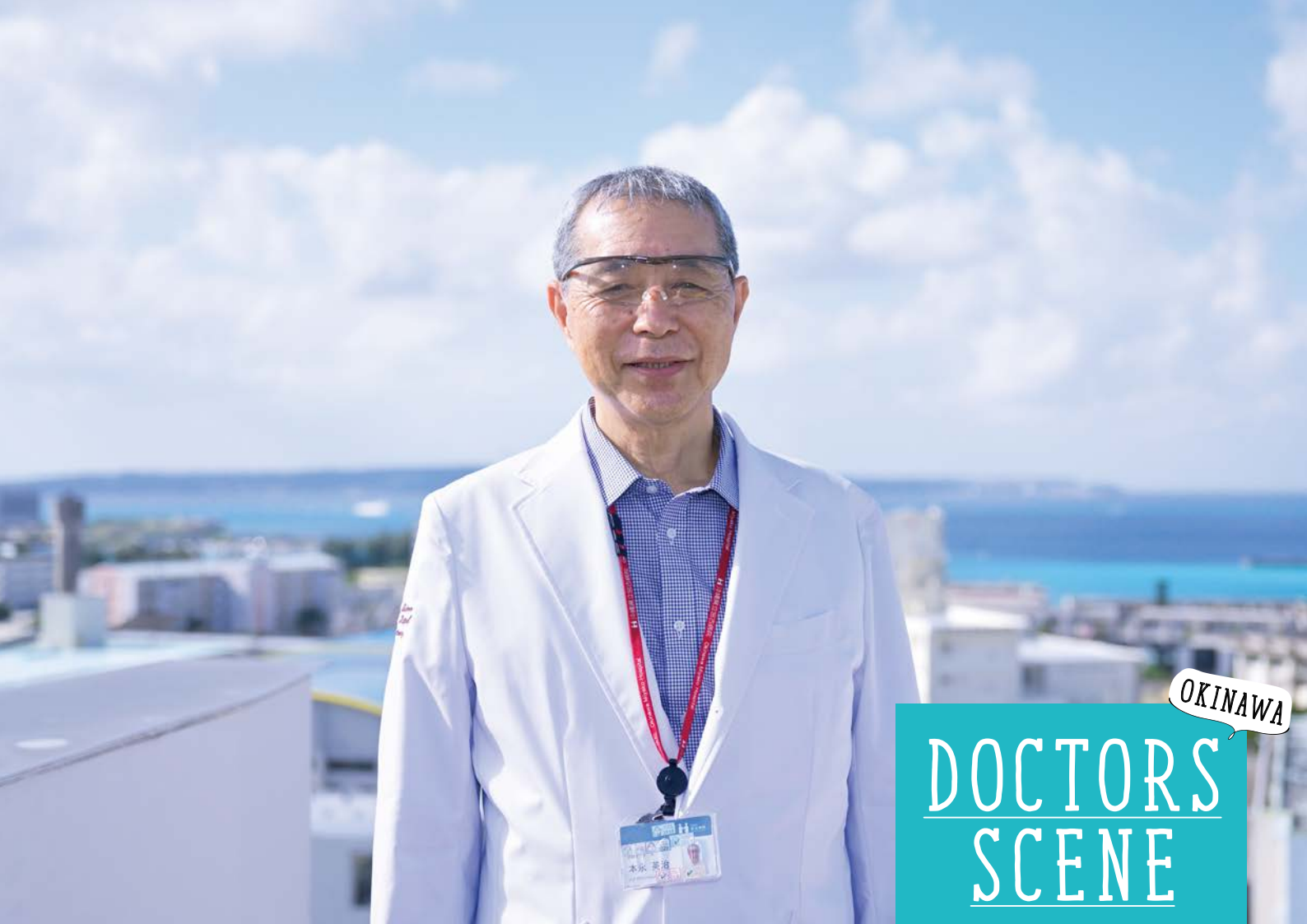
〒904-2293

沖縄県うるま市字宮里281番地

TEL:098-973-4111

<https://chubuweb.hosp.pref.okinawa.jp/>





OKINAWA

DOCTORS SCENE

沖縄の総合診療
(在宅医療・緩和ケア)

#2 沖縄県立宮古病院



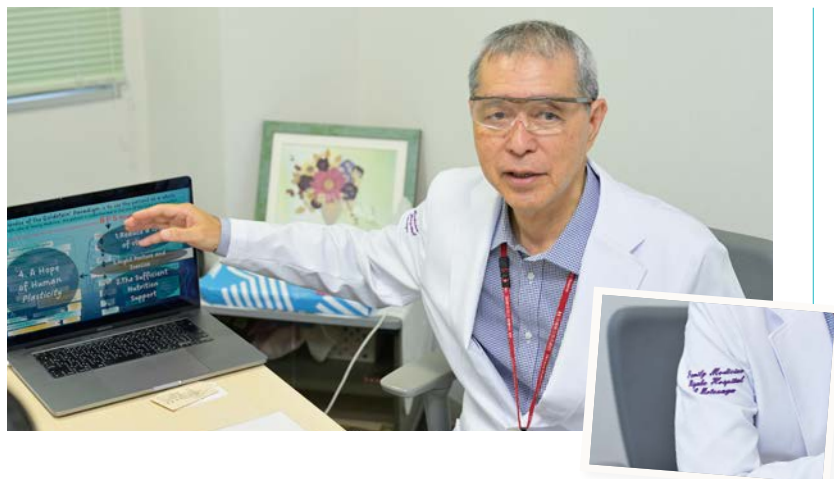
幸せと喜びを生み出す 信頼関係を構築する医療

沖縄県立宮古病院 前院長
総合診療科・リハビリテーション科 研修センター長

本永 英治 先生 Eiji Motonaga

[出身地] 沖縄県宮古島市(旧・平良市西里)

[出身大学] 自治医科大学(1982年卒)



「宮古病院は宮古島唯一の中核病院であり、全ての科において症例が非常に豊富。離島という住民の暮らしに密着した医療環境のなか、2年間の初期研修でも医師として相当高いレベルに成長できます」

そう語るのは沖縄県立宮古病院の前院長である本永英治先生だ。総合診療医として沖縄の地域医療の発展に貢献し、プライマリ・ケアを実践できる質の高い医師も多く育ててきた。定年によって院長を退任した後も、総合診療科とリハビリテーション科の診療に携わりながら、研修センター長として若手医師の育成に尽力している。

宮古病院の研修には、初期臨床研修プログラム『バイカ星』と、総合診療専門研修プログラム『うぶらうさぎ』がある。全国の離島病院のなかで基幹型研修病院は珍しく、初期研修から一貫して総合診療医を養成できる研修が特徴だ。「宮古島は医療資源が限られているため、助け合いのシステムも確立されています。組織の垣根はなくチームワークも抜群にいいです」

さらに宮古島では7つの

離島環境で、初期研修から 一貫して総合診療医を養成

診療所が在宅医療を実施しており、宮古病院は在宅患者の入院受け入れ先として連携、機能分担がしっかりと構築されているなど、在宅医療の素地もある。

「優れた総合診療医を育てるうえで、これ以上ない最適な環境です」と、本永先生は自信をもって断言する。

「総合診療医として大切な

のは、患者さんとの信頼関係を築き、お互いに納得した医療を実践すること。それができたとき、治療は大きく前進し、医師としても大きな喜びを得ることができます」

総合診療は信頼関係を築く医療である。その魅力を伝えるエピソードとして本永先生は次の話をしてくれた。

「外を歩いていると僕の名

前を呼ぶ人がいる。昔診た患者さんで、90歳を過ぎ車椅子でしたが、とても元気な笑顔を覚えてくれた。羽

田空港では、10年以上前に痙攣発作を診た当時中学生だった女の子とその父親に

会う。女の子は結婚し、今では子どもが3人いて元気

に暮らしていることを知る。月日が経っていても僕のことを覚えていてくれた。とても嬉しかったですし、医師としての大きな幸せを感じましたね」

「無知は罪なり、知は力なり」 大切なのは教養と基礎医学

信頼関係を構築するためには重要なのは、患者毎に異なるコンテキストを全人的に理解することであり、それには広い教養が必要だと本永先生は言う。

「患者さんごとに文化、方言、習慣、宗教も違う。医学知識だけでは対応できません」

本永先生は「宮古方言研究」にも打ち込み、方言を交えた会話で幾度も患者とのラポールを築いてきた。

「さらに解剖学や分子生物学、分子細胞免疫学など基礎医学も重要。診断や治療の糸口を見つける大きな武器となるはずだ」

座右の銘は「無知は罪なり、知は力なり」。本永先生は現在、リハビリテーション分野の新たな治療プログラムの構築にも取り組んでいる。総合診療医は、腕が鈍ることがない。これまで蓄積してきた膨大な知識と教養と経験が、医療をより良いものへと進化させ、人々の健康と幸せな暮らしを未来に紡いでいく。

Profile

自治医科大学卒業後、沖縄県立中部病院、沖縄県立八重山病院、伊是名診療所(伊是名島)、西表西部診療所(西表島)などを経て、1998年に沖縄県立宮古病院リハビリテーション科医長。2004年同病院医療部長、2011年同病院副院長兼医療部長。2010年『地域医療貢献奨励賞』を受賞。2017年同病院院長、2022年より同病院研修センター長。日本プライマリ・ケア連合学会認定医・指導医、日本内科学会総合内科専門医、日本リハビリテーション医学会専門医・指導医、日本専門医機構認定総合診療専門医。



本永先生が自ら撮影したリュウキュウアカショウビン

I was born in
Miyakojima city.
I am a city boy.



講演などの自己紹介で使用するキャラクター

照屋翔二郎先生は、琉球大学病院第三内科に所属する神経内科を専門とする医師だ。医局の派遣によって2021年から沖縄県立宮古病院の総合診療科に赴任した。

宮古病院では医療資源が少ないため、医師は専門外の診療も行つた。社会的背景が複雑な患者も多く、医学だけでは対応できない場面にも遭遇する。

「ある神経難病を強く疑う患者さんを診たとき、経済面やご本人のボリシーで『検査も治療も、何もしないでほしい』と頑なに言われたことがありました。そうした状況のなか、ご家族や行政とも話し合いながら、患者さんにとって最善の治療とは何かを考える。こういう医療があるんだと大きな学びを得ました」

大学病院で診ていた症例はほとんどが神経内科疾患だったが、宮古病院に赴任した2年間で照屋先生は専門外の疾患も診ることができるようになった。

「医師一人でできることはたかが知れており、わからないことがあれば他の先生にも聞ければいいんですよね。宮古病院は診療科間の風通しが非常に良く、気に

なることがあれば誰にでも廊下ですれ違いざまに気軽に聞くことができる。こうした環境は総合診療力を得るために、すごく重要な要素だと思います」

照屋先生は、専門性に特化した医師が総合診療を経験する意義は非常に大きいと言う。

「患者さんは『私はこういう病気です』といって病院に来るわけではありません。神経の病気が疑われて神経内科を受診した患者さんが、本当に神経疾患であるとは限りません。特に高齢の方は多数の疾患が隠れている事もあります。高齢化社会では専門性に特化した医師でも総合診療力がなければ困る場面もたくさん出てくるでしょう」

専門外でわからなければ他科に回す。それができるのは大きな病院に限られる。他の病院を紹介するにしても、診断までには時間がかかり患者の大きな負担となる。

「宮古病院に赴任してから、神経疾患で診ていた患者さんの悪性リンパ腫や、倦怠感があり神経疾患だと思って来た患者さんの副腎不全を診断しました。専門外の領

域でも自分で診断することができれば最短で然るべき治療へと導くことができ、患者さんの負担を減らすことができます」

高齢化により近年、パーキンソン病が増加しているが、それを診ることができる神経内科専門医は沖縄県内では非常に少ない。

総合診療力はこういった医師の偏在問題もカバーできる。

「高血圧などと同じように、総合診療力をもった医師が初期のパーキンソン病を診ることで、神経内科医は専門性の高い治療が必要な重い神経疾患に効率よく対応することができます。それを実現するために、希望のある先生にはパーキンソン病の患者さんを外来で担

これからの時代に必要な問題解決力のある医師に

当してもらい、適宜私も対応する、ということもしています」

そして照屋先生は医学生や研修医たちにこうアドバイスを送る。

「これからの時代、どの診療科に進んでも総合診療力は身につけるべき。患者さんだけではなく、医師として困ったときに自分を助ける大きな力となります」

総合診療力を獲得することは、医師としての幅を広げることだ。それは興味の幅を広げ、仕事の楽しさを広げることにもつながる。「私はジェネラリズムのある神経内科医です」と、自信を持って言える医師になりたいですね」と、照屋先生の声が大きく弾んだ。



DOCTORS SCENE
沖縄県立宮古病院

総合診療力は多くの患者だけではなく自分を助ける大きな力にもなる

沖縄県立宮古病院 総合診療科 照屋 翔二郎 先生 Shojiro Teruya

[出身地] 沖縄県中頭郡読谷村 [出身大学] 琉球大学医学部地域枠(2017年卒)

Profile

琉球大学医学部(地域枠)卒業後、沖縄県立北部病院で初期臨床研修。琉球大学病院第三内科(循環器・腎臓・神経内科学)の神経内科グループに入局。2021年より医局の派遣によって沖縄県立宮古病院総合診療科に赴任。



Hospital Data

沖縄県立宮古病院

〒906-0013

沖縄県宮古島市平良字下里427-1

TEL:0980-72-3151

<https://miyakoweb.hosp.pref.okinawa.jp/>

OKINAWA

DOCTORS SCENE

沖縄の総合診療
(在宅医療・緩和ケア)

#3 ドクターゴン診療所



在宅医療は、みんなの人生を “幸せ”にする医療である

ドクターゴン診療所 院長 泰川 恵吾 先生 Keigo Yasukawa

[出身地] 沖縄県宮古島市 [出身大学] 杏林大学医学部(1989年卒)



東京女子医科大学救命救急センターの開設当時から関わり、日本における救命救急の黎明期を支え、普及にも携わってきた泰川恵吾先生。救命救急医から一転、生まれ故郷である宮古島に戻り、在宅療養支援診療所である「ドクターゴン診療所」を開設。さらに神奈川県鎌倉市にも診療所を開設し、都市部における在宅医療も展開している。

「今でこそ救命救急医を目指す医師は多くなりましたが、僕が救命救急を始めた当時は2、3年に一人が入ってくればいい方。医局もなく外科のなかの救急チームでした。医師が集まるようになったのは、救命救急のテレビドラマが始まり、世間にどんどん知られるようになってから。ドラマの俳優さんには今でも感謝しています(笑)」

医局ができ、組織も大きくなり、ICU長、救急部長を務め、優秀な後輩たちも育ててきた。そこから一転、なぜ超急性期の現場か

大切なのは命を救った後の 生活を支えること

ら在宅医療の道に進んだのだろうか？

「実は救急医を続けながら、ずっと宇宙飛行士を目指していたんです。採用試験に挑戦し続けていたんですが、やはりハードルは高かったです。年齢的にも、そろそろ断念せざるを得ない時期だと感じました。それがひとつのターニングポイントとなったんです」

そして、泰川先生の背中を大きく押したのが、救命救急の最前線に携わるなかで、ずっとくすぶっていたある思いだ。

「救命率は飛躍的にアップし、多くの命を助けられるようになりました。しかし、障害が残ってしまう人も多く、完全に社会復帰できた人は少ない。命を助けた患者さんのその先の人生を考えたとき、何のために助けたのかわからなくなることもありました」

さらに高齢化社会の急速な進展によって、患者はどんどん高齢化していった。

ドクターゴン診療所



救命救急の病床にまで慢性期疾患の高齢者が占めるようになり、重症患者を受け入れられないこともあった。

「命が助かった人の、その後の大切な人生を支えること。そして急速な高齢化が進むこれからの日本には、治療後の生活をしっかりフォローする医療が最重要だと感じました」

こうして泰川先生は生まれ故郷の宮古島に戻り、無医村であった人口約3300人の旧・上野村に

Profile

杏林大学医学部卒業後、東京女子医科大学第二外科に入局。牛久愛和病院(茨城)救急医療科医長、東京女子医大救命救急センターICU医長などを経て、1997年から宮古島で訪問診療を開始。2000年にドクターゴン診療所、2004年に鎌倉診療所を開設。

元・日本救急医学会認定専門医、日本在宅医療連合学会認定専門医。





Hospital Data

ドクターゴン診療所

〒906-0203

沖縄県宮古島市上野字宮国746-17

TEL:0980-76-2788

<https://www.drgon.net/drgon/>

あると泰川先生は語った。
「たとえば外来で血圧を下げる薬を出す。2週間後に診ると全く血圧が下がっていない。治ってないからといってさらに強い薬を出す。しかし、血圧が下がっていない原因は薬を飲んでいないからなんです。患者さんの自宅に行くと、朝ご飯を食べない習慣だから朝食後に飲む薬を飲んでいないと

診療所を開設した。橋の架かっている離島へは、宮古島から自らジェットスキーを運転して海原を駆け巡り、訪問診療を行った。
現在、宮古島での在宅の受け持ち患者は210人ほど。鎌倉の診療所では400人の在宅患者を診ている。

救うべき命も看取るべき命も
同じように大切である

いう原因が分かる。生活をみることで患者さんの本当の姿がみえ、原因がわかり、最適な解決方法や正しい治療を導き出すことができるんです」
看取りも在宅医療において重要な仕事だ。泰川先生は年間に100人程の患者を看取っている。看取りというと、後ろ向きの医療だと思っている医師もいるが、泰川先生はそうではないと否定する。
「看取りは人生の卒業式であり、大切な医療なんです。僕が常に大切にしているのが日本在宅医学会(現・日本在宅医療連合学会)の在宅医宣言文である。救うべき命も看取るべき命も、私にとっては同じように大切である」という言葉。助ける技術を最低限

もつてない医師は看取りをしてはいけないと思っています。助けてというときに助けられるから看取することもできるんです」

泰川先生は現在の生活を「幸せで楽しい」と笑顔で語る。

「宮古島はとても綺麗な場所。子どもの頃、ずっとここに居たいと思っていましたし、東京で救急をしているときも、どうやって宮古島に帰るかとかよく考えていたんです。この幸せな楽しい生活を一緒に続けてくれる医師、引き継いでくれる医師が一人でも多くいてほしいですね」

「ドクターゴン診療所」は日本在宅医療連合学会の認定施設であり、在宅医療専門医を取得することが可能だ。地域医療研修施設として医学生や初期研修医たちも全国各地から訪れている。

「研修に来てくれた医学生が卒業後に遊びにきてくれたり、当直を手伝ってくれる。それがとても嬉しいですね」

日本では今後、高齢化がますます加速し、在宅医療のニーズが高

医師としての充実度も高い
「幸せで楽しい」生活がある

まることが確かだ。高度医療も重要だが、高齢者に高額な医療費を掛けて難しい手術を提供するのは現実的ではない。
泰川先生が「幸せで楽しい」のは宮古島での生活だけではなく、医師人生としての充実度も高いからである。そこには在宅医療ならではの、患者や住民との生活の場を通した密接な交流も大きく関係している。

「大神島(宮古島から北約4kmの離島)へ往診に行く度に、患者さんではないおばあがお昼ご飯をつくって待っていてくれるんです。ここでお昼を食べてから往診に行きなさいと。食べていかないと怒るんですよ(笑)」

当時を振り返りながら語る泰川先生の表情には医師としての幸せがあふれていた。

「最期はちゃんと看取ることができました」

そのおばあの写真は泰川先生を見守るように、診察室の高い場所に大切に飾ってある。写真は色あせたが、おばあさんの姿は昨日のことのように色鮮やかだ。思い出す度に、泰川先生から優しい笑顔がこぼれる。



OKINAWA

DOCTORS SCENE

沖縄の総合診療
(在宅医療・緩和ケア)

#4 沖縄県立八重山病院



活気にあふれ、柔軟性と発展性の高い “若い”教育環境で島医者を目指す

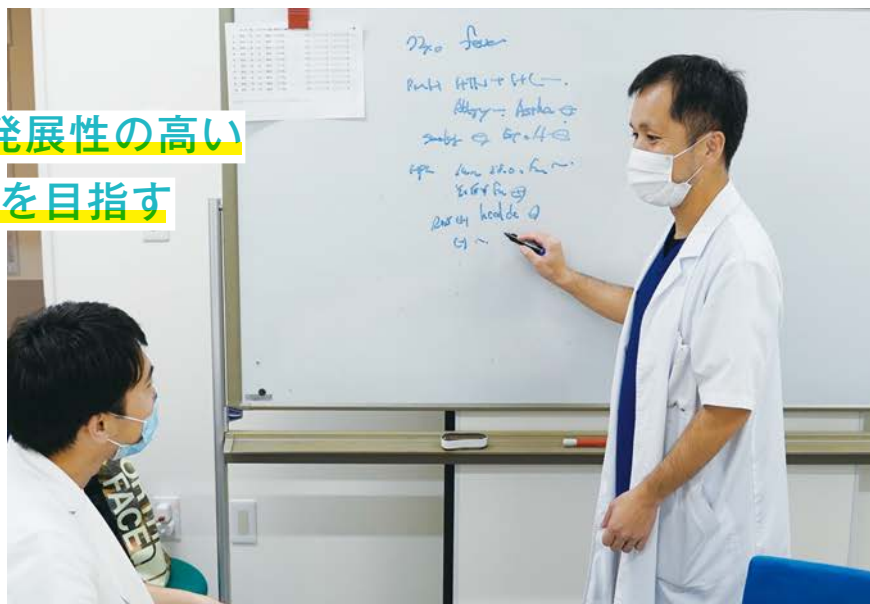
沖縄県立八重山病院 総合診療科

総合診療科専門研修プログラム 統括責任者

酒井 達也 先生 Tatsuya Sakai

[出身地] 大阪府(中学卒業後、沖縄県那覇市に)

[出身大学] 自治医科大学(2012年卒)



2023年にはスタッフが8名にまで増え、新たに専攻医2名も加わった。八重山病院の総合診療科が対応する医療は実に幅広い。3次救急や集中治療を要する重症患者も診ながら、在宅医療(看取り)、緩和ケア、そして離島診療所の支援も行うなど、島医者としての実力を獲得できる抜群

沖縄県立八重山病院には、全国各地から医学生、研修医が島の医療を学びに訪れている。2022年からは、総合診療科専門研修プログラム「南ぬ島(ばいぬしま)」がスタートした。教育病院となつたのは、ここ5年の間。その旗振り役として、指導医などの人材確保や教育体制の構築に尽力してきたのが酒井達也先生だ。

赴任した2018年

総合診療科の医師は酒井先生一人だけ。それからわずか5年後の

若い医師たちが活躍できる 教育病院としての新しさが魅力

臨床力は磨けるが、アカデミックさに欠けることが離島医療の弱点だ。酒井先生は「離島でも学べる」教育環境を目指し、全国各地の優れた総合診療医たちとオンラインを通して積極的に繋がり、アカデミックな経験ができる体制も構築した。「本州の先生と一緒に論文を執筆したり、ご指導いただきながら英文のケースレポートを作成したりとアカデミックな活動もできます」

の環境にある。さらに酒井先生は八重山病院ならではの特徴として、若さを挙げた。「30代の若い指導医が揃い、全国の医学生や研修医が学びに訪れ、院内は活気にあふれています。そして教育病院として日が浅い若さから生まれる、研修の柔軟性や発展性の高さも魅力。加えてお互いの顔が見える環境なので、各診療科の先生たちからも学びを得やすい。専攻医の一人は外科にも興味があり脳外科の手術があれば夜間でも来ています」

目指すのは“離島でも学べる”環境と『総合診療、八重山にあり』

総合診療科ではスタッフ体制も充実したことでワークライフバランスも向上。生活面でも申し分のない環境にある。「石垣市はコンパクトシティでとても暮らしやすい。自然豊かで少し車を走らせると美しい海に出会える。住むだけで日々癒される贅沢な環境があります」

ニーズは高いが総合診療医を目指す医師は少ない。キャリアへの不安や多彩なスキルを習得することにハードルを感じている医師、さらに在宅医療(緩和ケア)は終末期であり、救う医療ではないと誤解している医師も多々いる。

「緩和ケアは終末期だけではなく、診断された時から始まるあらゆる病気に對して必要な視点。病気は身体的苦痛と働けなくなるといった社会的苦痛もあり、両方をケアできる総合診療医の役割は非常に大きいんです。そして若い先生たちが訪問診療に関わる環境づくりも大切。経験することができなければ楽しさも知ることができません」

八重山病院の教育病院としての若さは、総合診療に高いハード

ルを感じている医師にとって入りやすいのではないだろうか。酒井先生が目指すのは、『総合診療は、八重山にあり』と言われる病院だ。医師のレベルが島の医療レベルになる、という言葉に胸に、未来の医療を支える優れた医師を育成する。

Profile

自治医科大学卒業後、沖縄県立中部病院で初期臨床研修、後期研修。卒業後4年目から2年間、離島の一人医師として阿嘉診療所(阿嘉島)に勤務。2017年に沖縄県立中部病院。2018年より沖縄県立八重山病院地域診療科(現・総合診療科)に赴任。日本プライマリ・ケア連合学会認定家庭医療専門医・指導医・病院総合診療認定医



「自分の理想とする目指すべき医師像が、全ての病気を診ることが出来る島医者だったんです」

波平郁実先生は、沖縄県立八重山病院の総合診療科専門研修プログラム『南ぬ島(ばいぬしま)』の第一期生である。

初期研修2年目の地域医療研修の場になんとなく選んだ八重山病院。そこでの経験が3年目の進路を決めた。波平先生は複数の患者を担当するなど、地域医療研修で短期間だけ来た「お客様」としてではなく、一人の医師として責任ある医療を任された。実際に自分で治療にあたった経験から熱射病治療のプロトコルを発表すると、それが認められ採用された。

「短期間しかない。お客様、なのに患者さんを任せていただき、経験が浅くてもいいものであれば認めていただける。その柔軟性の高さに大きな魅力を感じたんです。ここでなら興味の幅が広い自分を受け入れてくれ、理想の研修ができると思いました」

こうして波平先生は八重山病院の総合診療科専門研修プログラム『南ぬ島』

柔軟性が高く、幅広い興味に応える理想の研修環境

に進んだ。

「一期生としての不安はなかったですね。もう一人同期が一緒にいましたし、地域医療研修で八重山病院の先生方と仲良くなり、その後も交流があったので期待の方が大きかったです。それに八重山の先生方とまた一緒に働けることが楽しみでした」

八重山病院で総合診療医を目指す魅力は波平先生はこう語った。「自分の裁量や実力で治療後の患者さんの予後も変わってきます。八重山病院は学んだことをすぐに実践できる環境。日々の勉強が明日からの医療に着実につなげることができます。部署間の垣根はなく、コンサルも気軽に声を掛けてできる。島医者を経験してきた先生も多く、実践的なアドバイスをもらえることも大きな強みだと感じています」

八重山病院の総合診療科はスタッフ8名(専攻医2名を含まず)と非常に層が厚く、充実した教育環境にある。指導医の年齢は30代後半と若い組織であり、活気もある。こうした環境も

大きな魅力だろう。

波平先生が医師として常に大切にしている言葉が、『Think Globally, Act Locally』(グローバルに考え、地元から行動せよ)だ。グローバルな課題を、自分の身近な問題と捉え、地元から取り組む。超高齢化社会を迎え医療需要が増える一方、医師不足や医師の偏在など日本の医療には課題が山積みだ。総合診療医はそうした大きな課題を地元から解決に導く重要な役割も持つ。

総合診療医のキャリアパスは多

人々の人生に寄り添う。それをできることが大きな魅力

岐にわたり、活躍できる場も多い。病院、診療所(開業医)、在宅医療、そして看取りも大切な役割だ。

「僕よりも何倍も人生を歩んできた人の最期に寄り添えること。その人にとってベストなケアを本人やご家族と一緒に考え、寄り添っていきける。一人ひとりの幸せな人生を考え、追求する。総合診療や在宅医療はそれができることが大きな魅力なんです」

人々の幸せな人生を追求し、最期まで支えることができる医師。これほど素敵で魅力ある仕事はない。



沖縄県立八重山病院

DOCTORS SCENE

一人ひとりの幸せを考え、追求する。目指すべき医療の理想がここにある

沖縄県立八重山病院 総合診療科 専攻医 波平 郁実 先生 Ikumi Namihira

【出身地】沖縄県那覇市 【出身大学】琉球大学医学部地域枠(2020年卒)

Profile

琉球大学医学部(地域枠)卒業後、同病院にて初期臨床研修。沖縄県立八重山病院の総合診療科専門研修プログラム『南ぬ島』に専攻医第1期生として入職。



Hospital Data

沖縄県立八重山病院

〒907-0002

沖縄県石垣市真栄里584-1

TEL:0980-87-5557

<https://yaeyamaweb.hosp.pref.okinawa.jp/>





Muru Uchina

ムルウチナー



オール沖縄で 医師のキャリアを考えるマガジン

「Muru Uchina(ムルウチナー)」第11号をお届けしましたが、いかがでしたでしょうか。

沖縄県地域医療支援センターは医師の地域偏在解消を目的とする組織です。

この冊子で少しでも私たちの想いをお伝えすることができれば幸いです。

ご意見・ご感想などお待ちしております。

発行



沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215

沖縄県中頭郡西原町字上原207番地

琉球大学病院

おきなわクリニカルシミュレーションセンター内101

TEL: 098-895-1225

E-Mail: chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp>



ムルウチナー バックナンバー



Vol.1



Vol.2



Vol.3



Vol.4



Vol.5



Vol.6



Vol.7



Vol.8



Vol.9



Vol.10





Iheya 伊平屋
Izena 伊是名
Ie 伊江島
Nago 名護
Kume 久米島
Kerama 慶良間諸島
Naha 那覇

北大東島
Daito
南大東島

Yonaguni 与那国島
Ishigaki 石垣島
Iriomote 西表島
Hateruma 波照間島

Miyako 宮古島



沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
琉球大学病院 おきなわクリニカルシミュレーションセンター内101
TEL: 098-895-1225
E-Mail: chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

<http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp>

